



娘と一緒に小じんまりとした玄関前で

旅の楽しみの一つは宿。どんな宿でも日常の難事から解放してくれる。

東京に旅する時の宿の手配は、東京に住む娘がしてくれる。娘のマンションに泊まればいいのだが、三階でエレベーターがなく、足の不自由な妻には不向きだからと宿を取ってくれる。

宿を決める基準は、この「巡礼の道」を書くのに役立つかどうかで、決まるとき前に関連の資料などが送られてくる。二年前、帝国ホテルに泊まつ

た際は四冊も届いた。帝国ホテルに限らず、名門と呼ばれるようなホテルは本で紹介されていることが多い。

年（一九二四年）に東京駅が誕生した翌年に駅構内に開業。長い歴史を誇る名門ホテルだが、客室数は百五十室とあまり大きくはない。それは東京駅構内という制約があるからだろう。

ホテルの玄関は東京駅丸の内駅舎の南口にある。小じんまりとした地味な玄関なのは、隣りにある皇室専用の丸の内中央玄関に配慮したからだろう。だから、東京駅を通つても、駅舎の中にホテルがあることを知らない人が多かった。そこで、

今はリニューアルされて東京駅のホームを見るところではできないが、その部屋の前の壁には「点と線」と当時の「時刻表」が展示してあつた。

送られて来た「東京駅ステーション物語」によるところ、清張のほか、川端康成、内田百閒なども利用し、江戸川乱歩や森瑠子の小説にも登場している。

思わず笑つたのは、二階に「東京駅長室の真上

東京ステーションホテル

一週間の東京旅③

東京ステーション ホテル物語

レイルウェイ・ライター
種村直樹



ホテル百年の歴史がつまる

第25讲习题

いたからと一泊だけこのホテルを選んだのは、松本清張のベストセラー「点と線」がここで書かれたことで有名だったからだ。 小説にも出てくる寝台列車「あさかぜ」は学生時代、上京の際に利用していたので、興味深く読んだ記憶がある。当時、東京駅一番ホームから十五番ホームまで、間に列車が入らず、この間を見通すことができたのは一日四分間だなどつた。この

京駅は新幹線、東北線、中央線などの起点になっている、つまり東京駅が「○キロ」で、それを示す「○キロポスト」の位置の上に「○キロポストの部屋」と呼ばれる部屋があるのも面白い。